人が動物に示す興味には、何通りかのパターンがある。もう何でも、たいていの動物を見ると可愛くてしかたのない人、薄気味悪くなる人、中には象の小便する様を見て、やたらと感心している人もある。生態学的にしか見ない人もある。

私は動物を見るとたいてい哀しくなる。特に類人猿はいけない。仲間を檻に閉じ込めているような複雑な気持ちになる。先方もそんな表情で、何万人という見物客をただ虚な目や眺めている。人間の不遜さを詫びたい気持ちになる。

動物園を巡り、あらゆる人に動物を見せようというのがどういうことなのか、私にはよくわからない。日曜日ごとに何万と押しかけ、動物を躁鬱病にさせる。大半の観客はキリンの首はなるほど長いとかそういうことしか覚えてない。そんなことなら動物を閉じ込めるより、完全な野生状態の写真とかフィルムで見せるほうが効果がある。ほとんど野生味を失なった憂鬱そうな動物を見ても価値はない。寝てばかりいるライオン、デブデブのヒョウ、腹がふくれ過ぎ

て下も見えないオランウータン。そしてこういうのは、子どもを育てる本能も失なっている。中には交尾の方法さえ知らず、飼育係がエロ映画を見せようかと、真剣に考えなければならないのもある。餌がふんだんにあって、ただ漫然と生きているだけ。ゴリラは園舎でテレビの西部劇にかじりついている始末。人と動物の顔写真の分類をゴリラにやらせると、自分のだけは人の部に仕分けるという。西部劇の見過ぎで、ジョン・ウェインになった気だ。

どうにも哀しい。

私は柴系の雑犬を飼って十三年になる。体はまだ立派なのだが、視力が衰え、勘が鈍って、よく電柱にぶつかる。車のタイヤにもぶつかり、少し後退って驚いたように首をかしげ、しげしげと見直している。つないでおくと一日でも大いびきで眠りこけ、放すと即座にゴミ溜からだ。三年前までは山野を疾駆して猪を追った犬だが、もういけない。二度と動物は飼わないつもいだ。哀れで見ていられない。そういうのを見ると、他所の犬の将来までが、そぞろ哀れに思える。犬だけではない。全ての動物にそう思う。

近所の電柱で三百六十五日つながれっぱなしの犬がある。一分と離してもらえない。門の格

あとがき

子から頭を出し、照っても降ってもただじっと通行人を見送っている。ふさいだ目だ。それでも犬を可愛がっていると、飼主がそう考えていたら、何かが狂っている。

そういう閉じ込めた動物を子どもに見せても、子どもは当然だとしか思わない。哀れだという気が起きない。これはたいへんなことだ。こういう子どもは閉じ込められた人間を見ても反応しなくなる慣れがある。それを防ぐには、小亀でもよい、自分で飼わせてそれから死ぬ様もつぶさに見せることだ。殺したければ殺させてもよい。それで動物はかわいそうだと思うようになれば、まともな人間だ。

いきなり近年大流行の動物愛護を誤いたところで、空念仏にしか過ぎない。ビフテキを食いながら、牛の頭を撫でているようなものだ。

動物を殺しまくるハンターが、突然、純粋の愛護家になる例は実に多い。空念仏ではなく、悲惨な血の数々、動物のどうしようもない哀れさをつぶさに知るからだ。

知ることは大切だ。

花はなぜあれも種類があり、それぞれに色彩豊かなのか？　クジャクはなぜあんな美しい羽根があるのか？　ライオンの尻尾は長くてなぜ先にだけ毛があるのか？　スカンクの体色が

鮮かなのはなぜか？　皆それぞれに理由がある。そういうことと、動物のかくれた生態をこの本には集めた。もちろん、この本にあることを知ったからとて、いかほどの価値はないかもしれぬ。だが、前述したようなハンターにも簡単になれなければ、動物を飼って情操教育をしようにも、不可能な家庭が、いまや多い。人の体験から門戸を開かねばならない時代でもある。その門戸を開く一助になればと思う。

私は水量一トンばかりの水槽に真鯛と石鯛を飼ったことがある。石鯛は一枚歯でサザエを殺ごとかじるくらい獰猛で、攻撃心が強い。当然真鯛に襲いかかった。弱い真鯛は突進して来た石鯛の凶悪な口を、自分の大きな口でキスするように包み込んでしまった。そして押し返す。何度攻撃しても同じ。そういう防御法もある。こうした意味のことを、本書から読み取っていただければ、幸せである。

西村寿行